リレー連載　第三回

執筆者の素顔：矢澤洋爾の巻

●主義主張：

①幸福至上主義

人間はすべからく幸福であらねばならぬ。

行動基準の下は損得である。中は善悪である。上はそれが幸福をもたらすかどうかである。

善き人が必ずしも幸福になるとは限らないが、人は幸福なとき必ず善人である。

幸福には人間の浄化作用がある。

人間は幸福になる権利がある、のではなく、幸福になる義務がある。

②喫煙＝放屁論

喫煙は放屁と同じである。煙草を吸うことは屁をこく事と同じである。

どちらも自分は気持ちいいかも分からないがまわりの人には臭くて迷惑だ。

人によっては生理現象で我慢ならないこともあろうから、絶対にするなとは言わない。

目くじらを立てて迫害するかのような扱いは大人気ない。

ただ、まわりの迷惑を考えて出来れば隠れてこっそりやって欲しい。

屁をしたければ便所でやるように、煙草を吸いたければ煙所(えんじょ)でやって欲しい。

この事を思いついて僕は煙草をきっぱり辞める事が出来ました。

③「自己＝愛＝運命」論

これは長くなるから別途原稿にします。

●好きな言葉

之ヲ知ル者ハ之ヲ好ム者ニ如カズ、之ヲ好ム者ハ之ヲ楽シム者ニ如カズ。（論語）

●好きな作家

暇つぶしに読む場合：阿刀田高、池上彰、井沢元彦、司馬遼太郎、清水義範、立花隆、山崎洋子、山本周五郎

真面目な場合：宮澤賢治、谷崎潤一郎

●好きな本（＝二回以上読んだ本）

出家とその弟子（倉田百三）

知的生産の技術（梅棹忠夫）

巨富を築く１３の条件（ナポレオン・ヒル）

デカメロン（ボッカチオ）

こころ（夏目漱石）

青べか物語（山本周五郎）

●好きな映画（＝二回以上見た映画）

カサブランカ、椿三十郎、ローマの休日、生きる、赤ひげ、アパートの鍵貸します

●好きな音楽家

ベートーベン、ブラームス、モーツァルト、ビートルズ、クリフォード・ブラウン、熱田修二

●好きな曲

ベートーベン　歌曲「アデライーデ」「イッヒ・リーベ・ディッヒ」、ピアノソナタ「悲愴」第二楽章、ピアノ協奏曲第四番、交響曲第三番、交響曲第九番（特に第三楽章）
ブラームス　交響曲第一番
モーツァルト　ホルン協奏曲、クラリネット協奏曲（特に第二楽章）
イブ・モンタン　ピカルディの薔薇
クリフォード・ブラウン　春の如くに
ＳＭＡＰ　たいせつ
田原俊彦　チャールストンにはまだ早い
太田裕美　雨だれ、夕焼け
ビートルズ　全部

●嫌いな事

無駄。
無駄は大嫌い。お金のように湯水を使う。お風呂の水は洗濯に使い、あまったら庭に撒く。
無駄の嫌いな「魚柄仁之介」の考えに共鳴する。ただ、秋刀魚を骨まで食べるのは残念ながら出来ない。

●名前の由来：僕が矢澤洋爾になったわけ

名前というものはその機能からして次ぎの二つの一件矛盾する要求を満たすべきである、というのが僕の持論です。
まずその人を特定するという機能を満たすためある種の特異性をもつべきではないか。どこにでもあって、同姓同名が沢山あるような名前はその機能を果たせない。他の人とは違う「その人」を特定するためにどこにでもあるような名前では困る。
次ぎに名前は人に読んで貰うものであるので、他人が簡単に読める表記がされてなければならない。特異性を追求するあまり「これ、なんて読むんですか？」なんてその都度聞かれるような表記では名前はその機能を果たせない。
つまり、特殊でかつ誰にでも簡単に読んで貰える、そういう名前が理想的だ、というのが

僕の持論です。

僕がまだ若く髪の毛も豊富にあって文学作品をよく読んでいた頃、強い憧れを感じていた作家が二人います。宮澤賢治と谷崎潤一郎です。宮澤賢治はその理科系の知識がふんだんに織り込まれたロマンチックな文章がとても好きでした。（文末参照）谷崎潤一郎はあれは小説というより一つの体験だった。「母を恋うる記」とか、読んでいて自分が主人公なったかのような臨場感、観客席からゲームを見ているのではなく自分がプレーヤーであるかのような錯覚を味わわせてくれました。本当に背中がゾクゾクするのを感じたものです。この二人にホンノ少しでもいいから近づきたい、宮澤ほど実のあるものは書けないだろう、潤一郎ほど潤いのあるものは書けないのは分かっている、でも少しでも近づけないか、という強い憧れがありました。その気持ちをこめてペンネームを作るとしたら、実のないミヤザワで矢澤と潤いのない潤一郎を合わせて矢澤一郎にしよう、と長く思っていたのです。ただ、この名前「一郎」というのがどこにもありそうで、僕の持論の 1 番目の要求性能を満たさない不満がありました。

そうこうする内、1 年半ほどのアメリカ生活を経験する機会がありました。その時驚いたことの一つが、我々日本人の名前をローマ字書きしたものを彼等がちゃんと読んでくれないことです。我々の感覚から言うと、例え発音が正しかろうが間違っていようが「ヒラリー」と書いてあれば「ヒラリー」と読めるし、「ゲーテ」と書いてあれば「ゲーテ」、「ギョーテ」と書いてあれば「ギョーテ」と読める。カタカナで書いてある名前を指差して「これなんて読むの？」なんて尋ねることは決してありません。ところが、ローマ字で書いた僕の名を「これなんて読むの？」と何度聞かれた事か。「なんだ、英語というものはまともな伝達能力がないのか」と呆れて、そして「どうしてだろう？」と考えてみました。以下は僕の仮説です。
例えば「Haruo」という名前があるとします。日本人は当然「Ha-ru-o」と認識して読みます。ところが彼等アメリカ人は「Har-u-o」と認識するのではないか？"market"にしても"first"にしてもそうですが"ar"とか"ir"とかは一つに結びついている、との先入観がある。そこで彼等はまず「ハー(Har)」と読んで次ぎに子音もなく「u」と「o」が続いている。"ie"なら「イー」"eau"なら「オー」と読むんでしょうが、"uo"となると「こんな文字の連続にあったことがない、一体どう読んだらいいのだろう」と戸惑ってしまうのではないか。

この経験から僕は名前をローマ字表記した時に欧米人にも素直に読んでもらえるような名前にしたいなあ、と思ったのです。別に欧米人に迎合するわけではありませんが、ローマ字表記するのは彼等に読んで貰いたいと思うからですものね。スーっと読めないような名前は良くない。例えば「譲治」なら「George」と表記すればほとんど間違いなく読んでくれるだろう。だけどあたかも欧米人であるかのような迎合するような名前は嫌だ、日本人

のとしてのアイデンティティは確保したい。普通の欧米人にはない名前で、かつ素直にスッと読んでくれる様なのはないか、と思いつつ「Yorge」を思いついた次第です。まだ欧米人に試したわけではないが、これならきっと「ヨージ」と読んでくれるだろう、と思っています。
よし、ペンネームは Yorge Yazawa で決まりだ。このイニシャルは"Y.Y"。二つの"Y"だ。"two Ys"。トゥー・ワイズ。こりゃ"too wise"の洒落になるぞ。こりゃ面白い。

あとは"Yorge"をどう日本語表記するかです。最初は「洋二」でした。DOKUGAKU に参加した最初の頃はこの名前で出てました。ここで僕のもう一つの欲が出てきます。日本人の名前で音読みと訓読みが出来る名前への憧れです。例えば「隆明」と書いて「リュウメイ」と「タカアキ」の両方に読める、というアレです。「ヨージ」に訓読みをプラスできないだろうか、と漢字辞典をめくるうち「爾」という文字に出会いました。「洋爾」と書けば「ヒロチカ」と訓読みできる。
よし！これで行こう！
こうして僕は矢澤洋爾になったのです。 05.11.20

<u>●蛇足</u>
宮澤賢治「ポランの広場」（これを読むと心が癒されます。）
つめくさの花がともす小さなあかりはいよいよ数を増し、そのかおりは空気いっぱいだ。見たまえ。天の川はおれはよくは知らないが、何でも X という字の形になってしらじらとそらにかかっている。かぶとむしやびろうどこがねは列になってぶんぶんその下をまわっている。愉快な愉快な夏のまつりだ。誰ももう今夜はくらしのことや、誰が誰よりもどうだというような、そんなみっともないことは考えるな。おお、おれたちはこの夜一ばん、東から勇ましいオリオン星座がのぼるまで、このつめくさのあかりに照らされ、銀河の微光に洗われながら、愉快に歌いあかそうじゃないか。黄いろな藁の酒は尽きようが、もっときれいな、すきとおった露は、一晩そらから降りてくる。おお娘たち、（町の人形どものように、手数を食った馬鹿げた着物を着ないでも、）おまえたちはひときれの白い布をかぶれば、あとは葡萄いろの宵やみや、銀河から来る鈍い水銀、さまざまの木の黒い影やらが、ひとりでにおまえたちを飾るのだ。

<u>●次回の登場人物　日出彦さんにお願いします。</u>
・今まで行った所で一番印象に残っているのはどこですか？その時のことをお聞かせ下さい。
・好きな作家、好きな言葉、その他「好きな・・」「嫌いな・・」を教えて下さい。
・　自分の子供に「これだけは守れ」と言うことがあったらお聞かせ下さい。